随想

「番匠川源流の碑」の記

武田　剛
（会員　佐伯市木立）

一昨年、番匠川漁協組合長の三浦渉さんから「組合の創立六十五周年記念に『番匠川源流の碑』を建てる事になったので、碑文を書いてほしい」と頼まれた。

「どうして私に？」と尋ねたら、「以前、佐伯史談であんたの作った『番匠川の詩』と云うのを読んだ。あれを三分の一くらいに縮めたのでいいから」と事も無げに言う。私もつられて「あゝそれで良ければ」と簡単に引き受けた。

しかし考えて見ると、私は番匠川本流の住民でなく、傍流木立川の流域に住んでいるので少々気が引けた。だが後世に名が残る碑文を書くのは大変名誉な事で、こんなチャンスを逃す手はないと欲が出た。私は二十年前の佐伯史談を捜し、わが『詩』を読み返した。十二番まであってかなり長い。厚かましく再録させて戴く。

番匠川の詩

武田　剛

佐伯史談一六七号「史談の広場」所載

一、かもしかの渉る三国の
佩楯はしぐれてやまず
西南の戦のあたり
億をふる化石は濡れて
椎茸の榾場の淵に
杣人はやまめ影追う

二、炭がまの煙は消えて
なみよろう山に杉立つ
河鹿鳴く鍾乳洞の
葉桜に風のそよげば
白きはぎ洗うにまかせ
宵やみに蛍を呼べる

三、聖嶽古人の洞の
霧晴れて茶の芽かぐわし
媼らは柴を折り焚き
翁らは一揆を語り
深潭の潜龍のごと

緑なる玉露を含む
四、久留須川合せて蒼き
鬼ケ瀬の鯉の水音
かわせみは狭霧に消えて
若鮎の堰を越ゆれば
さやけくも稲穂の鳴れど
水うがつ人の語らず
五、峨々とした釈魔の嶺の
狼声に旅人おびえ
越えしとか中の谷なる
峠より起きし奔馬か
井崎川飛沫をあげて
床木川　天領下る
六、野をめぐり望む古城の
栂牟礼に雄叫び遠し
城を背に落ちゆく主従
残月の磧に立てり
かじかめる指に掬せし
その流れ今に語るを
七、水ぬるむ澪の岸辺の
川浪に笹垣立て、
水鏡うつれる底に
くまえびの細きはさみよ
白魚はさだかに見えず
椀にくむいのちはかなし
八、海よりの迎えの汐に
たゆとうてはぐくむ貝を
弥生なる太古の人の
すなどりし白潟のあと
貝塚の白きを見れば
悠久の流れを想え
九、鶴屋城天守を映し
花火映え弦歌を浮かべ
千石の舟は白帆に
風はらみ上に旅立つ
帰る帆の京の便りを
あらそいて舟子に聞きしか
十、日向灘　八潮路こえて
掠めくる海賊たちの
あわれにも果てし葦間に

かりがねの鳴きて落つれば
淡雪を茜に染めて
元越の頂き暮るゝ

十一、はるかなる歳月倦まず
はこびたる細き砂々
洲をつくり鶴の舞いしが
拓かれて戦の庭に
銀翼の弾を抱きて
若者の征きて還らず

十二、夏草の茂れる跡の
工場の濁りの水の
泡立ちて海にそゝげば
番匠の母なる川の
その嘆き消ゆる日はいつ
遠き日の藍を恋いつゝ

これを三分の一に縮めるのかと思った。難しい。ヨーカンを三つに切り分ける様なわけにはいかない。新しく作った方が楽である。苦吟十日あまり、碑文の草案が出来た。

番匠川源流の碑

およそ二億年の昔　巨大な地殻の変動は　広大な海底を隆起させ　九州山地を形成した。標高七百米を越える佩楯の山頂には　おびただしい貝やウニが化石となって地表に露出し　天地創造のロマンを証明する。

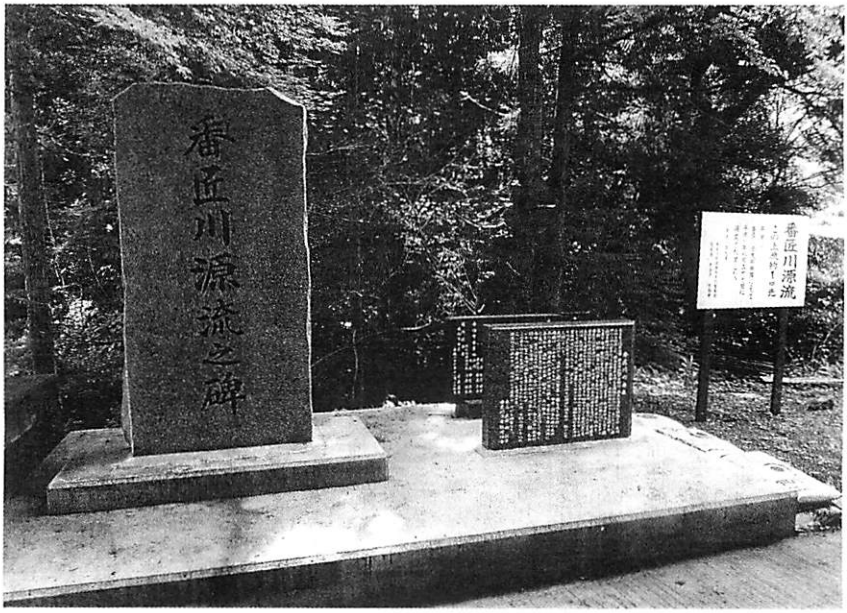
奥深き樫峰の山塊は　雲ひくゝ　しぐれて止まず。石清水は渓となり瀧を生じ　奇峰　聖嶽の古人渉り手因尾川となる。川は鍾乳洞のしたたり　茶樹　杉樹　椎茸の榾の雫を集めて番匠川と名を改める。

番匠とは誰が名付けし、その昔　京の大工は番匠と呼ばれ　番匠笠　番匠がねは諸国に伝播す。九州の名も無き大河、橋を架けんとする時、あやまって番匠がねを急流に落とす。探すうち、誰云うとなく番匠川となる。

川は久留須、井崎、堅田、木立など大小四十八の支流を合わせ、たゆとうて佐伯湾にそゝぐ。源流を発して四十二キロ、佐伯の母なる大河は　豊後水道に溶け入りて濁さず。その流れ　太古より倦まず　はこびたる砂々は河口に洲を拡げ　拓かれて人煙にぎわう。大河の流域の人渡来せし稲に驚喜し　堰を造り田を開く。瑞穂は　二千

年のいのちをつなぐ。
中世、栂牟礼城の主従　西に落ち　鶴屋城の天守は川面に映え　万巻の文庫は海内にあまねく。満帆の千石舟、舷深く　上に旅立つ。
たゞ哀れ、苛酷な年貢の誅求に命をかけてあらがった人の名は消えず、重し。
嗚呼、清流は秘めて語らず。今はいたるところ　白き瀑布に若鮎は踊り　蒼き深潭には　落鮎の群れて潜龍の如く　鰻　白魚　いかつい蟹の美味に酒杯を置くあたわず。
この幸をはぐくむ大河に　すなどるわれら一同　萬斛の想いを込め　こゝに「番匠川源流の碑」を建立する。
源流はこの奥一キロ　峻険にして道無し。けだし神聖なり。

木立　武田　剛　記す

これを持って漁協に出向き組合長に渡した。一読、「こりゃいい　こげなんが仲々書けんのよなあ」と褒めてくれた。そして、とても感じの良い職員の方から、鮎のうるかを頂いた。大好物である。
しかし、その後何の音沙汰も無い。
ボツーになったのかなと思ったが、うるかを三本貰っていたので「まあいいか」と諦めていたら、一年程経った頃、「二十六年十一月二十九日に六十五周年記念式典を弥生で、源流の碑の除幕式は本匠の樫峰の現地で行います。」という案内状が来た。「やるといったらやるんだなあ」と感心した。
当日、原文がかなり長いので、みな刻んでくれたかなあと心配しながら、長い流域をマイクロバスで遡上した。
現地樫峰の集落は、標高五百米で木立の元越山と同じ高さ、天空に近く源流の地と呼ぶにふさわしい清々しいたゝずまいだった。かって私は二十数年前樫峰の隣の佩楯山に畏友矢野徳彌さんに案内され登った事がある。
その時の感動で『番匠川の詩』が出来た。矢野さんの御好意が無かったら、今日の碑文は生まれていない。樫峰に着く早々、区長さんが「あんたに会いたかった」と言って堅

い握手をしてくれたのに感激した。
石碑は大きな楓の木の下で紅白の幕に包まれていた。
式は地元や組合員、行政や河川工事の業者の方々で盛大だった。序幕の綱を引っ張っておそるおそる石碑を見たら美しい御影石に私の全文が彫られていた。
「少々長かったらしいな」「この文で良かったのか」「書き落とした事は無かったか」と頭の中でいろいろな思いが駆け巡る。しかし、もう碑(いしぶみ)は消せない。ふと羽柴弘先生の御顔が目に浮かんだ。私が心から尊敬する人である。御存命なら碑文を書くのに、もっともふさわしい人である。「先生の碑文なら値打ちがあろうに、オレのでは」と内心忸怩(じくじ)たる思いがする。
葉を落とし始めた明るいくぬぎ山、青からセピア色に変わり始めた杉の梢が射す青空、何と云う美しい源流の地であろうか。以来、私の脳裏には、あの樫峰の洗った様に美しい風景が消えない。
源流の碑よ　番匠の流れと共に永遠なれ。